

修士論文（要旨）  
2019年1月

<V1+V2>型複合動詞の研究  
-<～かける>と<～かかる>に着目して-

指導 青山 文啓 教授

言語教育研究科  
日本語教育専攻  
217J3009  
李 欣

Master's Thesis(Abstract)  
January 2019

A Study of V1+V2 Compound Verbs: Focusing on ~Kakeru and Kakaru

Xin Li

217J3009

Master's Program in Japanese Language Education

Graduate School of Language Education

J. F. Oberlin University

Thesis Supervisor: Fumihiko Aoyama

## 目次

第1章	序論	1
1.1	研究背景と目的	1
1.2	調査方法と調査対象	2
第2章	先行研究	3
2.1	自他動詞の先行研究	3
2.1.1	自他動詞のペア	3
2.1.2	非対格自動詞と非能格自動詞	3
2.2	複合動詞の先行研究とその問題点	3
2.2.1	寺村(1969)による分類	4
2.2.2	長嶋(1976)による分類	4
2.2.3	影山(1993, 2013)による分類	5
2.3	<~かける>と<~かかる>に関する先行研究	5
2.4	まとめ	6
第3章	<~かける>と<~かかる>をV2とする複合動詞ペア	8
3.1	タイプAの考察と分析	9
3.1.1	1Aの用例分析	9
3.1.2	2Aの用例分析	11
3.2	タイプBの考察と分析	16
3.2.1	1Bの用例分析	16
3.2.2	2Bの用例分析	21
3.3	まとめ	23
3.3.1	1Aのまとめ	24
3.3.2	2Aのまとめ	25
3.3.3	1Bのまとめ	26
3.3.4	2Bのまとめ	27
第4章	<~かける><~かかる>をV2とする複合動詞	29
4.1	Wに入る用例の考察分析	29
4.2	Xに入る用例の考察分析	31
4.3	Yに入る用例の考察分析	34
4.4	Zに入る用例の考察分析	35
4.5	まとめ	37
4.5.1	Wのまとめ	38
4.5.2	Xのまとめ	38
4.5.3	Yのまとめ	39
4.5.4	Zのまとめ	39
第5章	おわりに	40

## 参考文献

本論文は自他ペアである<～かける>と<～かかる>を V2 とする複合動詞を、主に影山(1993, 2003)と長嶋(1976)の説を基に分析し分類を試みる。主な調査対象は、『現代日本語書き言葉均衡コーパス』『新潮文庫 100 冊』の中の<～かける>と<～かかる>およびその活用形を含む複合動詞の用例である。そのほか、『複合動詞レキシコン』『日中辞典 第 2 版』『岩波国語辞典 第七版』の中の解釈、用例をも参照する。

本論文は<～かける><～かかる>を V2 とする複合動詞をペアごとに、あるいは単独で分析し、分類を試みた。

まずは、ペアごとに<～かける>と<～かかる>を V2 とする複合動詞を分析し、自他性という視点からペアの中の複合動詞の用法上、文型上の区別と、2つの複合動詞の関係について考察する。ここで言う文型は、動詞がいくつかの名詞を取ることができるかということを目指す。さらに、複合動詞のペアとは、2つの複合動詞において、V1 あるいは V2 が同一の動詞で、残る一方が自他ペアのものを指す。具体的な分類を以下に示す。

A. V2 が<～かける>あるいは<～かかる>で、V1 がそれぞれ自他ペア

1A. 2つの複合動詞の自他性が一致する

例：<詰めかける><詰まりかける>

2A. 2つの複合動詞の自他性が一致しない

(1) 自他ペアである

例：<終えかける><終わりにかける>

(2) 自他ペアでない

例：<立てかける><立ちかける>

B. V1 に同一の動詞が現われ、V2 がそれぞれ<～かける>と<～かかる>

1B. 2つの複合動詞の自他性が一致する

(1) 類義語である

例：<出しかける><出しかかる>

(2) 類義語でない

例：<押しかける><押しかかる>

2B. 2つの複合動詞の自他性が一致しない

(1) 自他ペアである

例：<引きかける><引きかかる>

(2) 他動詞と非能格自動詞のペアである

例：<突きかける><突きかかる>

(3) 関連性がない

例：<掴みかける><掴みかかる>

以上の言う複合動詞の自他ペアは、形態的・用法的・文型的に自他対応する2つの複合動詞のことである。さらに類義語は、用法も、文型も類似する2つの複合動詞のことである。

次に、個々の複合動詞とその V1、V2 の自他性と取る名詞の範囲や、V1、V2 と複合動詞

全体の関係などに焦点を当てて分析し分類する。その分類は以下のように4類にまとめることができる。

W. V1もV2も複合動詞の文型を取ることができる(語彙的複合動詞)

例： 水島が優太ちゃんの肩にジャンパーを投げかける。  
水島が優太ちゃんの肩にジャンパーを投げる。  
水島が優太ちゃんの肩にジャンパーをかける。

X. V1もV2も複合動詞の文型を取ることができない

1X. V2が文型をヲ格からニ格へ変更するが、名詞の範囲はV1とほとんど変わらない(語彙的複合動詞)

例： 義貞が足羽城に攻めかけた。  
×義貞が足羽城に攻めた。 → 義貞が足羽城を攻めた。  
×義貞が足羽城にかけた。

2X. V1、あるいはV1、V2とも文型は保たれるが、名詞の範囲が変わる(語彙的複合動詞)

例： 王女が男に質問を投げかけた。(Wに入る<投げかける>の用例と対照する)  
×王女が男に質問を投じた。  
×王女が男に質問をかけた。

3X. 文型も名詞の範囲もV1、V2のと完全に異なる(語彙的複合動詞)

例： 多くのフランス人が前庭に詰めかけていた。  
×多くのフランス人が前庭に詰めていた。  
×多くのフランス人が前庭にかけていた。

Y. V1は複合動詞の文型を取ることができないが、V2は複合動詞の文型を取る

1Y. V2が文型に影響を与える(語彙的複合動詞)

例： 弥太が水を二人の頭にぶっかける。  
×弥太が水を二人の頭にぶつ。  
弥太が水を二人の頭にかける。

2Y. V1とV2の文型への影響力は均衡である(語彙的複合動詞)

例： ディクソンがはしごを壁に立てかける。  
×ディクソンがはしごを壁に立てる。  
ディクソンがはしごを壁にかける。

Z. V1は複合動詞の文型を取るが、V2は複合動詞の文型を取ることができない

1Z. V1の文型を補強するためにV2と複合する(語彙的複合動詞)

例： 彼の目が私に何かを問いかけていた。  
彼の目が私に何かを問うていた。  
×彼の目が私に何かをかけていた。

2Z. V1と同じ文型を取る(統語的複合動詞)

例： 糸が切れかかった。

糸が切れた。  
×糸がかかった。

以上のような分析によって、〈～かける〉〈～かかる〉を V2 とする複合動詞の性質、特徴をある程度解明した。しかし、不備なところもまだ解明されていないところもある。これらの問題は将来の研究の中で深めることにしたい。

## 参考文献

- 石井正彦(1983)「現代語複合動詞の語構造分析における一観点」『日本語学』vol. 2, No. 8
- 石井正彦(1984)「複合動詞の成立—V+Vタイプ複合名詞との比較」『日本語学』vol. 3, No. 11
- 石井正彦(2007)『現代日本語の複合動詞形成論』ひつじ書房
- 影山太郎(1993)『文法と語形成』ひつじ書房
- 影山太郎(2013)「はじめに」『複合動詞研究の最先端：謎の解明に向けて』pp. iii-ix. ひつじ書房
- 影山太郎(2013)「語彙的複合動詞の新体系—その論理的・応用的意味合い」『複合動詞研究の最先端：謎の解明に向けて』pp. 3-46. ひつじ書房
- 影山太郎ほか(2014)「動詞+動詞型複合動詞の研究文献一覧」国立国語研究所
- 何志明(2010)『現代日本語における複合動詞の組み合わせ』笠間書院
- 斎藤倫明(1992)『現代日本語の語構成論的研究—語における形と意味』ひつじ書房
- 斎藤倫明(2000)「書評 複合動詞の構造と意味用法」『国語学』vol. 51, No. 1
- 斎藤倫明/石井正彦(1997)「研究史の素描—語構成論において取り扱われてきた/ている/るべき)こと—」『語構成』pp. 281-321. ひつじ書房
- 朱春日(2009)「複合動詞の自・他対応について—派生に基づく対応を中心に—」『世界の日本語教育』19, pp. 89-106
- 陳曦(2007)「学習者と母語話者における日本語複合動詞の使用状況比較—コーパスによるアプローチ」『日本語科学 22—特集 コーパス日本語学の射程』国立国語研究所
- 寺村秀夫(1969)「活用語尾・助動詞とアスペクト(その1)」『日本語・日本文化』第1号, pp. 32-48
- 長嶋善郎(1976), 斎藤倫明/石井正彦(編)(1997)「複合動詞の構造」『語構成』pp. 213-231. ひつじ書房
- 西尾寅弥(1982)「自動詞と他動詞—対応するものとししないもの—」『日本語教育』47, pp. 57-68
- 野村雅昭/石井正彦(1987)「複合動詞資料集」国立国語研究所
- 早津恵美子(1987)「対応する他動詞のある自動詞の意味的・統語的特徴」『言語学研究』6, pp. 79-109
- 姫野昌子(1999)『複合動詞の構造と意味用法』ひつじ書房
- 姫野昌子(2001)「複合動詞の性質」『日本語学』vol. 20, No. 8
- 宮内あゆみ(1989)「複合動詞の結合パターン」『東京女子大学日本文学』72, pp. 119-133
- 森田良行(1978)「日本語の複合動詞について」『講座日本語教育』14. pp. 69-86. 早稲田大学語学教育研究所
- 山本清隆(1984)「複合動詞の格支配」『都大論究』21, pp. 32-49
- 『岩波国語辞典』(第七版), 岩波書店
- 『現代日本語書き言葉均衡コーパス』, <http://nlb.ninjal.ac.jp/>, 国立国語研究所
- 『新潮文庫の100冊』, 新潮社版
- 『日中辞典』(第2版), 北京・商務印書館/小学館
- 『複合動詞レキシコン』 <http://vlexicon.ninjal.ac.jp/db/>, 国立国語研究所